

心奥探訪

～想い巡り 立～

2025年4月

未来ある若者たちが新たな門出を迎えていく。

彼女の子ども達もまた、

新しい環境で

新しい仲間と

新しい生活が始まっていた。

そこに至るまでの約一年。

「今日までのことを残しておきたい」

伝えられなかったこと

捉えられなかったこと

届けたい言葉をいつかのために

変わることのない想いを今、紡いでいく。

この一年が十年くらいあったみたいと語る彼女。

そんな濃密な月日の中、この春彼女の息子は高校に進学した。

「本質は変わらなくても、表面的に違いがある」

母の目から見て、長男はこの一年で大きく成長していったという。

もともとムードメーカーだったという少年。

彼女から見た少年は周りのためや家族のため、

ひいては母である彼女のための選択が多かったという。

そんな少年が青年へと成長していったこの期間。

まさしく成長痛とも呼べるようなものが彼女にも、

そして彼自身にも起こっていたのかもしれない。

それは昨年の夏頃から感じ始めていたという。

日頃から重きを置いて伝えていること、

それは自分で決めていくという力だと語る彼女。

「どうなってもいいんだよ」

彼女が伝えるこの言葉は一見すると興味や関心がないように映ったり、
適当に答えているように受け取られる。

けれど言葉の真意はそこではない。

後悔するかもしれないかでもなく、うまくいくかどうかでもなく、
決めていくという力。

それは自らの人生を歩むためには必須の力だろう。

息子や娘だからではなく、大切な一人の人として接するからこそその願い。

しかし、この言葉が誤解なく正しく伝わるのは非常に困難でもある。

そして彼女自身もまた完璧な人間ではない。

子ども達からの意思表示があった時は最大限応えてあげたいと語る彼女。

「けど、ちょっと待ってねが増えてしまった。」

自身の活動、娘の出場するプレゼン大会など、緊急性のあるものを優先し
後回しにすることも少なくなかったという。

進学のため塾へ通いたいと申し出た時も夫婦間での連携が取れず、
うやむやになってしまった事もあったと語る。

いわゆる反抗期があったのかもしれない、

彼自身の想いの葛藤があったのかもしれない、

しかし、結果的には時を同じくして起こった出来事の数々が、不信感を募らせてしまった。

そうして少しずつ、少しずつ、ずれ始めた歯車は大きくなる。

「もっと話したいことがあったのかな」

なんとなく感じつつも互いに言葉に出来なかったという彼女。

『みんなでボウリングに行こう。』と言った息子に対して、

一人で行ってもいいよと返してしまった事もあったという。

自身の感情、自身の状況もさることながら、

大丈夫だろうと思ってしまうていた――と。

それは少年がまだまだ幼かった時期と少し似ているのかもしれない。

けれど当時と違うのは少年が選択した先が自立、

親離れ、そして子離れ。

選びたかったわけではないかもしれない。

状況の中、せざるを得なかったのかもしれない。

けれどこの経験を経て少年は青年へと歩んでいく。

まるで自分と母は違うのだと言うように、

誰かのためではなく、彼は彼自身を主張し表現していく。

「一番応援できる立場でいられたら嬉しいな」

この先、彼が描く世界はどんなものか。

彼女はただただ突っ走って行ってほしいと微笑む。

これから広がる世界を楽しみにしながら、

彼女自身もまた歩み出す。

旅立つ背中をいつまでも見守りながら。

かけがえのない大切な想いを感謝と共に